

特別支援学校（知的障害）における話し合い活動の指導についての実践的研究

棚内伸子

増田貴人

（弘前大学大学院教育学研究科）

（弘前大学）

KEY WORDS: 知的障害 話し合い ファシリテーション

1. 背景と目的

話し合い活動は、子ども同士が話し合ったり、協力して考えを生み出したりすることによる学びを重視した、指導・援助方策の一つである。しかし、これまで特別支援教育（知的障害）における話し合い活動では、児童生徒の話し合いスキルに注目した指導は見られるものの、メンバー間の相互作用や教師のファシリテーションを含む指導法までは議論されていない。

そこで、教師がいかに生徒のコミュニケーションを促し、話の流れを整理、確認しているかというファシリテーションの観点から、話し合いにおける指導場面の様相を明らかにし、その上で、生徒同士の相互理解や問題解決につながる教師の働きかけについての示唆を得ることを目的とした。

2. 方法

Z 特別支援学校高等部作業学習「接客」班に所属する生徒6名、教師2名を対象とし、「接客」班で定期的に取り組んでいる話し合いの場面を取り上げた。本研究では、実践場面に關する「丁寧な対応とスムーズな商品提供」をテーマに話し合いを行い、司会者、記録者、報告者という役割が設定されている。また、話し合いの順序や話型見本はフォーマットとして示されている。

指導対象となる話し合いは20分間で、2016年11月～2017年2月に行われた話し合いにてデータを収集し、分析資料とした。話し合いの様子は全てビデオに録画し、その映像から逐語録を作成した。分析の手順は以下の通りである。

- ①逐語録の作成
- ②生徒・教師の音声言語及び表情や身振り、態度などの非音声言語も含めた発話について、言語関係カテゴリー表（假屋園ら、2008）に基づいた機能分析。
- ③教師の音声言語及び表情や身振り、態度などの非音声言語も含めた発話について、教師の働きかけカテゴリー表（尾之上ら、2011）に基づいた機能分析。
- ④発話時間の計測と分析。

3. 結果

（1）話し合いの「総括」と教師の働きかけ

「総括」とは、ある話題についてまとめようとする発話や、終結しようとする発話カテゴリーである。生徒、教師それぞれの「総括」カテゴリーの出現率（図）は、11/25～1/30までは低い値を示していたが、2/20～2/24では、生徒の「総括」発話が高い値を示した。そこで、終結直前の発話の状況を見たところ、11/25～1/20の話し合いでは、議題の終結直前に教師の【発案】や【情報提供】が出現しており、2/20～2/24では生徒による【発案】や【情報提供】【連続的發展発話】が出現していた。

（2）教師の発言要求と【連続的發展】発話

【連続的發展】発話とは、「先行発話を受けて、その内容を発展、精緻化していく発話」であり、「特定の話題を積み上げていくやりとり」である。12/2以降の話し合い活動では、【連続的發展】発話が出現し、さらに、複数回での出現もしていた。また、2/20～2/24の話し合いでは、生徒による【連続的發展】

発話も見られた。この時の教師の働きかけカテゴリーを見ていくと、生徒の発言を促す働きかけや精緻化発言要求の項目が上昇していた。

（3）話し合いにおける話者主体の状況と教師のファシリテーション

発話している相手別にその相互作用を整理してみたところ、生徒同士の相互作用よりも、教師へまたは教師からの相互作用が多く見られた。さらに、生徒の発話が、特定の個人（主に教師）との限定された二者による発話になっていた。

1回の話し合いにおける発話時間の平均は、生徒一人あたり49.8秒～119.1秒、教師一人あたり206秒～768秒で会った。このことから、教師の発話時間が長いことがわかった。しかし、話し合いにおける発話出現割合は、11/25～1/30までの回においては、大きな差は見られなかった。

4. 考察

これらのことから3点についての示唆を得ることができた。第1に、生徒の「総括」発話を促すためには、話し合いの終結前に教師の発話を控えることである。第2には、生徒の【連続的發展】発話を増加させるためには、教師が生徒の発言を促す《精緻化発言要求》や《関連発言要求》を行うことが有効だと考えられる点である。第3には、生徒間の相互作用や発話機会、発話時間の確保がなされる必要がある点である。これら3点から、教師がファシリテーターの機能を意識して介入していくことの大切さが示された。今後は、生徒同士の相互理解や問題解決につながるかどうかの検証を行っていく必要がある。

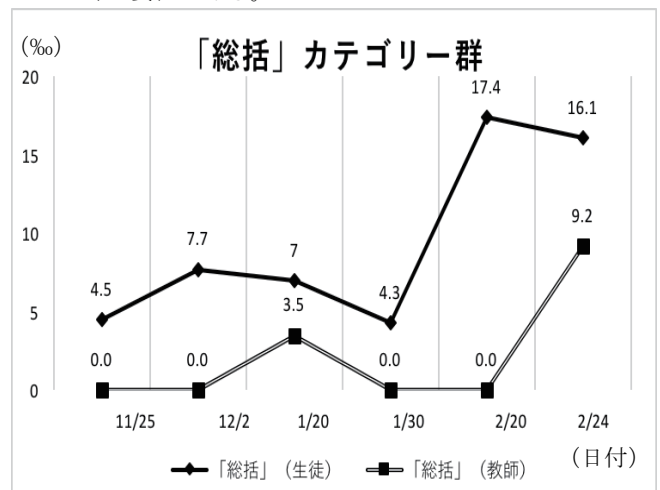


図 「総括」カテゴリー群出現率 (%)

5. 文献

- ・假屋園明彦・丸野俊一（2008）複式学級と単式学級に属する児童の話し合い過程の比較研究（Ⅱ）. 鹿児島大学教育学部研究紀要（人文科学編），59，179-234
- ・尾之上高哉・丸野俊一・松尾剛（2011）学び合う授業の実現に向けて、教師は如何に談話方略を運用しているのか. 教授学習心理学研究7（2）39-55

(TOCHINAI Nobuko, MASUDA Takahito)